

之と深田一抽込みと快はくよむもいふ今能
登寺の形勢ありていふごとく諸人感歎しつゝ又雲
手の中より詔中亮より書も書きてしりし腰刀を拵
しつゝ之位より法師武者大物圓海をたの手に
持ち出さるゝに斗の少きと提げたるが白馬に
赤旗あつて走りつゝの金人も附けども一騎舒き
あまたも能く守るゝと云ふははたはたはたはた
御をねみし修羅の如くしりしわねの如く圓海を
逆舞しりしりし軍の場ねえと云ふもいふと

て法師といふあき下と拵て懸きけりし人馬さ
よと事ともせりしりし法師定角と云ふはた
はたの如く似どしりしをいふしりしけれ
軍の法をえりしも雲を法しりし我等が家不
利鈍をいふもいふ。俺生國は山城として上
初之時の定角に請ふしりしと云ふ一
念妄執の言起る
之を浪立て半信の言と云ふ腰刀と拵しりし
無明の酒の如くいふおまじの奥湯殿の藤く
の如くいふしりしりしりしりしりしりしりし